

## 会派 4 年を振り返り

-2007.1.12-

---

2 月県議会最終日となった。村井県政最初の予算、久しぶりに修正なしの原案承認での決定である。県議会との信頼関係をベースとした結果だったと思う。

現に高校の授業料の値上げ、県立病院の分娩費の値上げについては、わが派 県民クラブ・公明はかならずしも賛成ではなかった。

高校の授業料の値上げについては、高校改革の方向がまだ確定されていない現在段階で、値上げは、時期早々ではないかという判断からである。しかし現在の各高校では、建物の老朽化が激しく、体育館が災害で壊れているのに、前田中県政時代の箱もの凍結で、そのままになっているケースや昭和30年代の設置以来、職業高校で機械等の授業機材が古いままになっており、値上げの分をその目的で使用するよう明記し、賛成とした。

また県立病院での分娩費の 5000 円の値上げについては、「本来分娩費は無料とすべきだ」が会派の意志であるため、検討に検討を重ねたが、産科医が著しく不足し、この大変な状況を打開するために、値上げ分を当てることを付帯事項としてつけ、賛成とした。

これらは、知事や理事者が議会の意志を、予算執行に当たり確実に実行するという議会制民主主義の基本の上に立つ信頼関係があるからだ。

大局にたって、基礎自治体である市町村が元気を出すために、産業振興や雇用対策に積極政策を展開し、市町村の財政をバックアップしようとする村井県政の姿勢を支援したからだ。

その背景には、県民所得が一人当たり 30 万円も下がってしまった全国でも稀な非常事態を何とかしなくてはという議会の危機感があったことも付記しておきたい。

県民クラブが院内会派として結成して、12 年が過ぎようとしている。メンバーも変わり、そこに流れる空気も変わった。

当初から一緒だった佐野議員と牛山議員が、離れられその後また一緒になり、「教育」を基本に据えた県民クラブ・公明となり、それぞれの立場を理解しあい、より高い次元での県政対応を模索してきた。しかしそこに流れる精神はけして変わることはなかった。

その精神は「地方自治である県政での主役は、あくまでも県民であり、県民の豊かさや満足を作り出すために、それぞれの自律した議員が、支持された選挙区の住民の代弁者としてまた長野県という行政の意志を決定する議会人として現場主義に徹し、先見性を持って堂々と歩もう」とするものであり、今の議員の活動振りに対して、議員を引かれた小田切、大和先輩から「県民クラブよくやっているぞ」との評価に安堵している。

長い長野県政の中で、保守も革新も超越し、あくまでも県民生活の目線に立った県民主義を掲げ、林初代県政から県政を背負う3つの会派の一つとして、活躍されてこられた伝統と歴史に感謝しながら、倉田議員、佐野議員、牛山議員、柳田議員、小松議員、高木議員、小林議員、村上議員のまじめな真昼の星のご努力に、改めて心静かに感謝する。